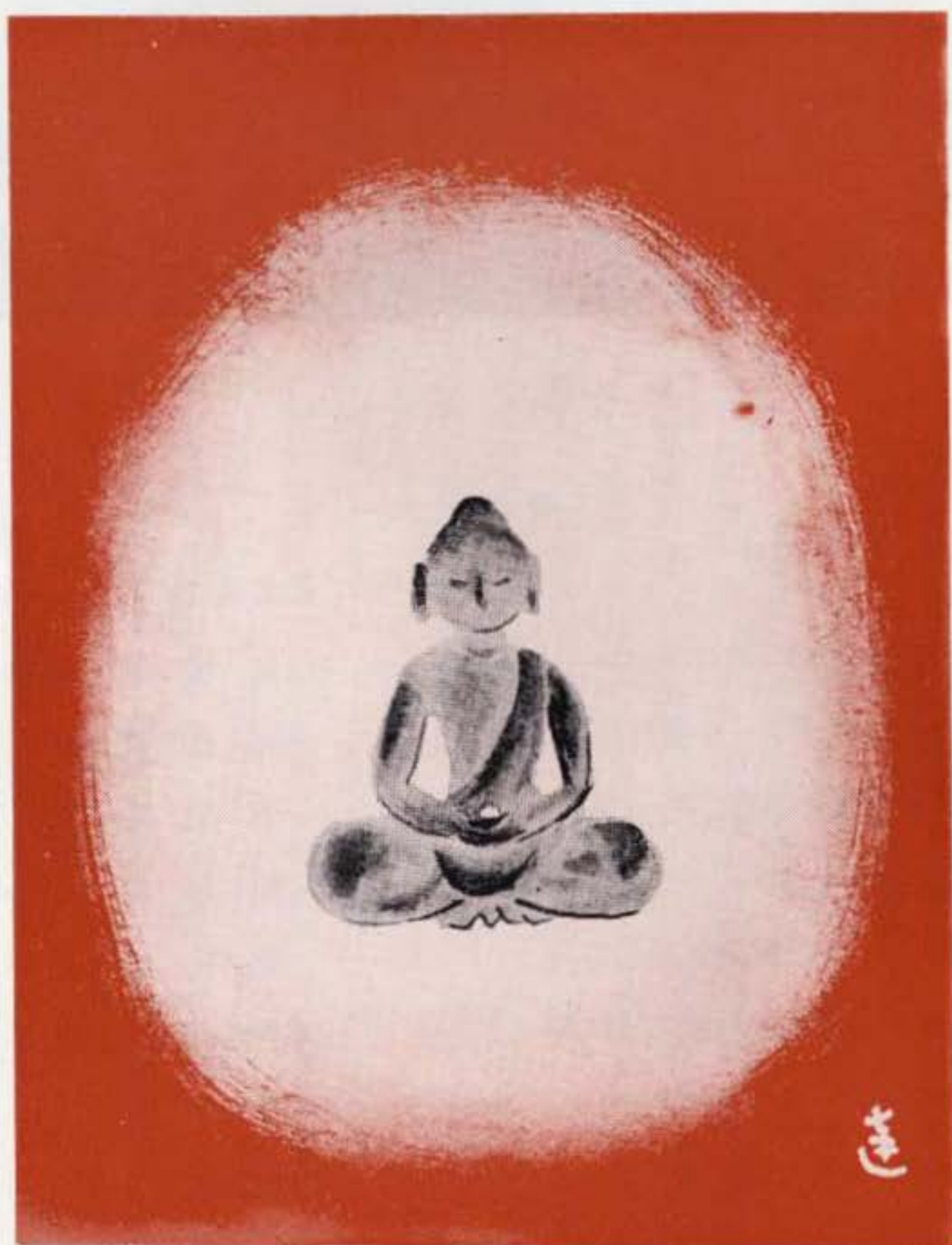


浄土

三月号

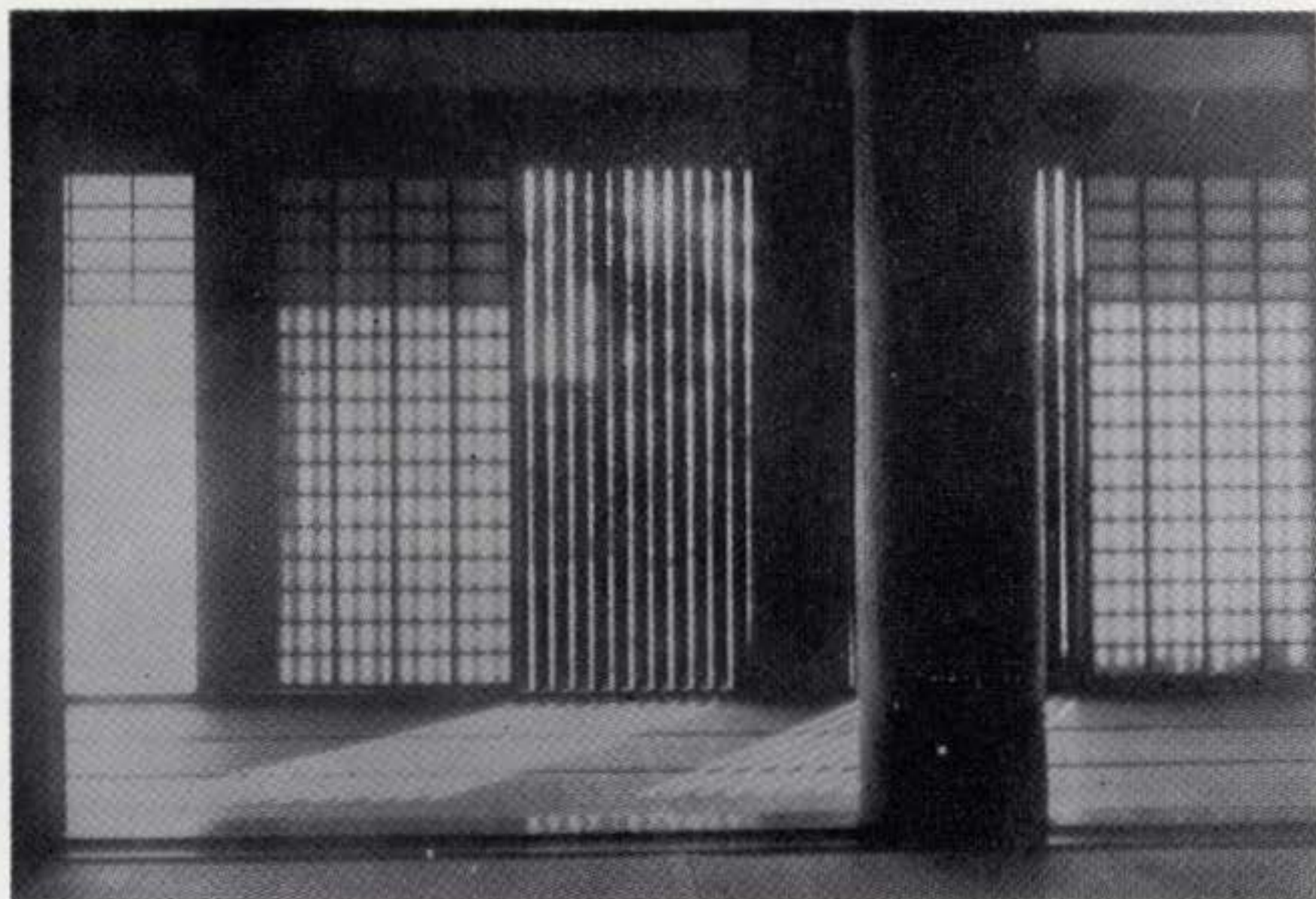


法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別扱承認雜誌第三五二号)
昭和四十五年三月一日発行
昭和四十五年二月二十五日印刷

第三十六卷

第三号



—目 次—

表紙「仏」松濤達文画

彼岸に到る道.....	後 藤 真 雄	(2)
夢と現実の都ブラハを訪れて.....	福 島 瑞 江	(6)
信仰は光明摂取の喜び.....	小 川 金 英	(11)
泣かずに泣いた私.....	前 田 繁 子	(14)
念仏生活 五重相伝のお話し③	藤 井 実 応	(17)
聖典解説「小消息」の御法語に学ぶ③	小 沢 勇 貫	(22)
心の仏.....	本 山 順 子	(26)
聖典物語③ カピラ城の滅亡	つるたたんせん	(28)
往相還相		(31)
宝物シリーズ ③ 伝勢誉愚底自筆辞世.....		(32)



今月のことば

死罪に遭うとも

最近のベストセラーズに藤原弘達氏の「創価学会を斬る」という本がある。本郷の仏書林で聞いたら「売れすぎて困る」とのこと。まことに結構なことだが、そうした評ばんの裏には、著者が創価学会をむこうにまわしての「体を張って」の悲壮な快意が漲っているのである。まことに見上げたものといわざるを得ない。

宗教界にも多士済々であるが、これほどに命を賭けての熱情をこめて創価学会に立ちむかった人のいないのは残念である。昔の祖師たちはこうした苦難に耐え、所信を公けにし、偽りの信仰をばげしく論難したものであるが、その情熱やいまいずこである。

かつて全日仏の依頼で「創価学会の批判的解明」を安居香山氏と共にまとめたが、日蓮聖人の性格分析が日蓮宗の忌避にふれ絶版の浮目にあつた経験をもち、二年前に著わした小著「創価学会」もまた、事前、ゲラ刷を学会に訂正され、それを拒否したために売上げ部数が半減したこともある。

日本人は「泣く子と地頭には勝てぬ」「ムリが通ればドウリ引こむ」「ながいものには巻かれろ」といって、どうも権力的なものに弱気のようなものである。筆者の場合もそういわれるかもしれないが、今回の「言論と出版の自由を守る」運動の波は筆者のささやかな受難の体験を「赤旗」紙上に紹介させるにいたらしめ、この運動をすすめる一つの実験とされた。

自分の利益のためには他人をしりぞけ、仲間にもわかつては高姿勢の宗門人が、念仏信仰の正統性を主張し、学会の非を鳴らすことに尻ごみするのはどうしたわけだろう。筆者は、一在家者が熱心に創価学会の不当性をハガキ、文書でさかんに宣布しているのを知っている。まことに尊いことである。「死罪に遭うともこのこと（念仏）いわざるべからず」と叫ばれた宗祖法然上人の末流を掬むものとしてまさに愧死すべきである。

（竹中）



彼岸に到る道

後 藤 真 雄

(東京江東区深川円通寺住職)

・ 彼 岸

彼岸という言葉は、原始經典といわれる法句經の中にも、「数多き人々のうち、彼岸に達するは、まこと、かづ少し、余の人はただ、この岸の上に、右に左に、彷徨さまようなり」と出ている所から見ても、古くから彼岸、此岸の言葉は釈尊の言葉として用いられていた事と思われる。

もっとも、川岸や海辺に立つものは誰しも向う岸に渡って見たい気持を持つ事は、極めて自然な事であろう。私も昨年団体旅行で岩国の錦帯橋へ行った。復元された錦帯橋の中途まで渡ったが、時間がなかった為、途中で引き返した。錦帯橋の美しさは今でもなつかしい思い出はあるが、向う岸へ

渡ったら、どんな風だったろうと今でも何か心残りがある。彼岸へのあこがれ、それは東西、古今を問わず、自然な気持ちとして考えられることである。従って釈尊が道を説く中に彼岸という言葉も多く使われた事と思う。殊にガンズス河のほとり等、思い起こされることである。

此の岸は生死であり、彼岸は涅槃であると書かれたのは、大智度論の第十二で、即ちまよいが此の岸であり、さとりが彼の岸である。如何にして迷いの此の岸を離れて、さとりの彼の岸に渡る事が出来るかが、問題なのである。これを到彼岸、梵語でパーラミター、波羅蜜多といい、般若波羅蜜多心經と共に、一般に親しまれている言葉である。これを度と釈している。

度とは渡しの事である。

・彼岸会の行事

然しこんなに古くから彼岸という言葉がありながら、仏教の一行事として、彼岸会が行なわれる様になったのは、印度でも、支那でもなく、日本独特のものなのである。日本後紀第十三、大同元年三月辛巳の条に「崇道天皇の奉為に、諸国分寺の僧をして、春秋二仲月別七日、金剛般若經を讀ましむ」と出ている所から見ても、大同以来、（西暦八〇六年頃）以来、一千二百年近く前から、日本に仏教の行事として彼岸会が行われて来たのである。比叡山坂本で廿一ヶ所、春秋二季に説法談義といつて、説教所が設けられ、諸方から大勢の人が聴聞に集った。この人達の便利の為に、曆にも彼岸という文字が載る様になった。

春夏秋冬と季節の変化の豊かな日本の国土には、寒い冷たい雪や氷の中から開放された麗かな春光の中に、のびのびと活動の季節に入る春分の日、焼けつく様な酷暑と、はげしい自然力とに戦い抜いて、静かな反省の思索の中に彼岸を見出す秋分の頃、この前後七日間を春秋二季の彼岸会として、よき修業の季節として、仏教修道週間が、お彼岸という親しみのある呼び名で、然も暑からず、寒からず、昼夜等分の時期

が、仏教の中道の思想とも結びついて、十数世紀の間、民衆の中にとけ込んで来たのである。

殊に中世、平安末期頃からの浄土思想の発達と共に、彼岸を西方浄土とする信仰が深められ、更に観無量寿經に説かれる日想観、入り日を觀じ、正しく西方に向い、極樂の想を觀じる、という事と、春分、秋分の入り日が正しく西に入る事とが結びついて、四天王寺の西門から、海にしづむ落日が、正しく極樂の東門に向つておるとして、四天王寺の日想観、お彼岸等と、盛んな行事となり、全国的に、欣求浄土の行事、亡き人々の追善、墓参、寺詣り、報恩行、といろいろな形で、お彼岸は続いて来たのである。

「乞食のこも新らしき彼岸かな」

のどかな寺の門前の人通りの盛んな様子が、この句の中からも、ほほえましくも感じられるのである。

仏教嫌いの明治政府も、明治十一年六月以後は春分、秋分の二季の皇靈祭として国民祭日に加えた。昭和廿三年七月の国民の祝日に関する法律でも、自然をたたえ、生物をいつくしむ日、祖先をうやまい、亡くなった人を偲ぶ日として、春分の日、秋分の日が祭日として残ったのである。

・もし明日がなかったら

以上でお彼岸の意味と、起りは大体おわかり頂けた事と思うが、ここで彼岸を少し掘り下げて考えて見たいと思います。

「お前には明日はもうないのだヨ」と宣告されたら、どんな風に思いますか、これは大きなショックだと思います。明日があるから今日があるのです。彼岸とは明日の事です。此岸とは今日の事です。明日への希望、そして理想への一歩前進、そこにこそ、今日の努力があるのです。今日一日の生き甲斐があるのです。彼岸とは希望であり理想であり、此岸とは現実であり、努力であります。

どうなるかわからず、又どうにでもなり得るのが未知の明日であり、どうする事も出来ないのが過去であり、現実の今日です。だからこそ、希望もあり、努力もする事になるのです。彼岸のない人生は、味気ない、本当につまらない人生といえるでしょう。

所がその人生にも終りがあります。私も先年、幽門狭窄症ということ入院、手術をうけた。私自身は「いよいよ癌になったナ」とひそかに覚悟をきめたのである。人生も終るか、さっぱりしたといってしまう、それまでの事ではあるが、実際はなかなかそうはいかないのである。やりかけの仕事、予定の仕事、いろいろの事が気になって来る。

然しこれはだれでもが一度は必ず当面する問題である。「死ぬ事も一仕事だヨ」といった人があるが、本当にそうである。

死後の世界、死後の彼岸、そこに西方の浄土、極楽の世界を欣求する信仰の世界が当然すぎる程当然の存在となってくる。

死後の彼岸なしに、生前の生き甲斐も、働き甲斐もないのである。いいかえれば、彼岸へのあこがれが人生の働き甲斐、生き甲斐であり、そこに死甲斐もあるのである。

然し目の前に見える向う岸ですら容易に渡る事が出来ないものにとって、死後の彼岸にそんなに、たやすく行くことが出来るだろうか。

・彼岸への道

春秋二季の両彼岸に坂本廿一ヶ所の説法談義にどんな説法がされたかは、今日詳かに知る事は出来ないが、彼岸への仏道修業の実践項目が説かれたに違いない。其の項目として、六波羅蜜、或は十波羅蜜が説かれた事と考えられる。六波羅蜜とは「布施（めぐみ）、持戒（つつしみ）、忍辱（しのび）、精進（はげみ）、禪定（しづけさ）、智慧（ちえ）」の六つの渡し舟である。六度ともいわれる。

お彼岸になると、各家庭で春は牡丹餅、秋はお萩と花になぞらえて、あんころ餅を作って、菩提所や、親戚や、近所の家にお配りする風習がある。戦争以来物資の不足から、近頃では少なくなったが、水っぽいのや、塩のきいたのや、夫々特長があつて、なつかしい事である。恐らくは六度の第一である布施の實踐が作り出した風習であらう。何か自分の出来る事で「させて頂く」という布施の気持である。財施、法施、無畏施と、布施に徹する時、貧欲、おしみ心の煩悩を減して彼岸への道を求める教えに随つた事であらう。

「野施行の折から、あられ時雨かな」

という句がある位だから、野に住む動物にも何か餌を与えたのであらう。

新しい時代の彼岸の風習として、病院の慰問、老人ホームの慰安、養護施設の訪問といった風習、親切運動の様なものが出て来ても良いのではないだろうか。

他人に迷惑をかけない様にする持戒行、彼岸中は一切腹を立てないと忍辱行、はげみの精進、心をしづめる禅定行、智慧行と六度行の近代化もいろいろと工夫されて、仏道修業週間として、ふさわしい新しい風習が考え出されても良いと思う。無縁墓地の供養もその一つであらう。

然し何といつても忘れてはならない事は先祖の墓参、先き

立った人への供養であらう。近年自然に起つて来たお彼岸の風習に、先祖の墓参ばかりでなく、先き立った友人、知人の墓を尋ねてお詣りする人の多くなった事に気づく事である。

・救い、助け

それは何故だろうか。特に戦争の打撃の多かつた所に多く見られるのは、戦争の苦しみが、自らの身命を布施する事も、物資食糧の不足に忍辱する事も、持戒も、精進も、禅定も、生き抜く為の智慧も、出つくす程体験したのである。今日漸くにして少し安定した生活に入つた時、静かに反省して、よく今日まで生きぬいて来た事に氣附くのである。自分一人の自力だけでこの苦難が突破出来たのではない。今は亡き友人知人の世話になり、御先祖の見えないお蔭のお護りがあったのである。自然と知人の墓までも尋ねてお詣りしたい氣持ちになるのである。やってやって、やり抜いたもののみが知る自分の力のみじめさである。法然上人ほどの人が自らを愚痴の法然房といわれ、ひたすらに南無阿弥陀仏と称えて、浄土を欣求せられた姿が、身にしみて感じられて来る。素直な氣持ちで念仏の信仰がわいて来る。彼岸へのあこがれが、念仏の声となつてあらわれ、そして更に今日の強い生活力が湧然として起つて来るのである。



＝カール橋から見たプラハ城＝

夢と現実の都プラハを訪れて

福 島 瑞 江

遠く九世紀以来ボヘミヤの王をいただき、千年有余の歴史を生きてきたチェコスロヴァキアの首都プラハの街には、そこここに塔門や古い教会、旧市庁舎の尖塔が一際高くそびえ、旧市街の中ほどをゆるやかな曲線を描きながら悠々と流れるモルドウ河を、幾筋かの長い橋が対岸の丘陵に横たわるプラハ城の方へと人びとを渡している。その橋の一つが有名なカール橋である。両端に塔門をもち、橋の両側の欄干上におよそ三十の彫像が立ち並び、神秘的な雰囲気漂わせている。十字架上のキリストとその姿を見上げる二人のマリヤの像、聖ヨゼフをはじめいろいろな聖人たち、これらの像は十三世紀にカール二世によって架設されたこのプラハのもっとも古い橋に、十七世紀の末から十八世紀の初頭に至って飾られたものときく。(ちなみに現在この橋は歩行者だけを渡し、車の通行は許されない。)このようにプラハにある名だたる記念的な建物は、みな一つの時代だけを代表するものではなく、幾世代にわたって積み重ねられ、蓄えられた歴史を擁しているようである。そしてプラハの街全体がこのような知りつくせぬ歴史のかもしれない夢幻の世界へと、容易に私たち旅行者を誘い入れるようである。

私がチェコを旅したのは昨年八月はじめの四日間で、

このうちまる二日間をブラハで過した。これは訪れるというにはあまりに短い時間であったかも知れない。しかし初めて共產圏を訪れるものの抱く不安と期待に対して、古都ブラハが提供した印象の強烈さは、歴史に還元された測りしれない長い時間となって私の心に刻まれたのであった。

宿舎の近く、街路をまたいで塔が建っていた。九世紀には王宮の塔門として建てられたが、中世になってその役目を失い、一時弾薬庫として使われていたために、今もその名で呼ばれている。縦長の梯形をした屋根には二本の避雷針が角のように突きでて、ちょっと童話の世界を思わせる。この塔門をくぐって黒ずんだ街なみをゆくと、カール大学街をすぎて旧市庁舎の広場へ出る。このあたりが旧市街の中心地で、二つの尖塔をもつチンの教会もこの広場に面している。チンとは砦のこと。中世ブラハの街をめぐる砦の一部に建てられたゴチックの教会だが、不思議なことに後世この教会の前面に別の建物がつけられ、道路から直接この教会に入ることができない。アーケードを入り、外見とはまるで違う別の建物のなかを迷い迷いして疑いながら重い扉を押すと、なかは闇のように暗い。しかし眼がなれてくるとまぎれもないカトリックの教会である。ブラハにはカトリックの教会は非常に多い。なかには一時期洗濯

屋になっていたなどという変った経緯をもつ教会もある。思えばここはヨーロッパ宗教史上に名高いヤン・フスの活躍した地である。十五世紀の初めにカトリック改革のフシスムはブラハでのろしを上げたのであった。

またこの旧市庁舎の塔もブラハの空の空間をきる塔の一つである。この塔には観光客たちを喜ばせる仕掛け人形の大時計があつて、正午にはキリストの十二弟子が、つぎつぎと二つの窓から挨拶をおくると、最後に鶏が一声高く鳴く。それと同時に見物人たちもおきまりの歓声をあげる……。

そしてこの広場からさらに北へ道をとると先のカール橋へ——この橋から右手の仰ぐような位置に、いわば旧市街山の手の一劃に聖ギイ大聖堂の尖塔を中央にかざして広がったブラハ城の威容をのぞむとき、古都への讚美は極に達する。

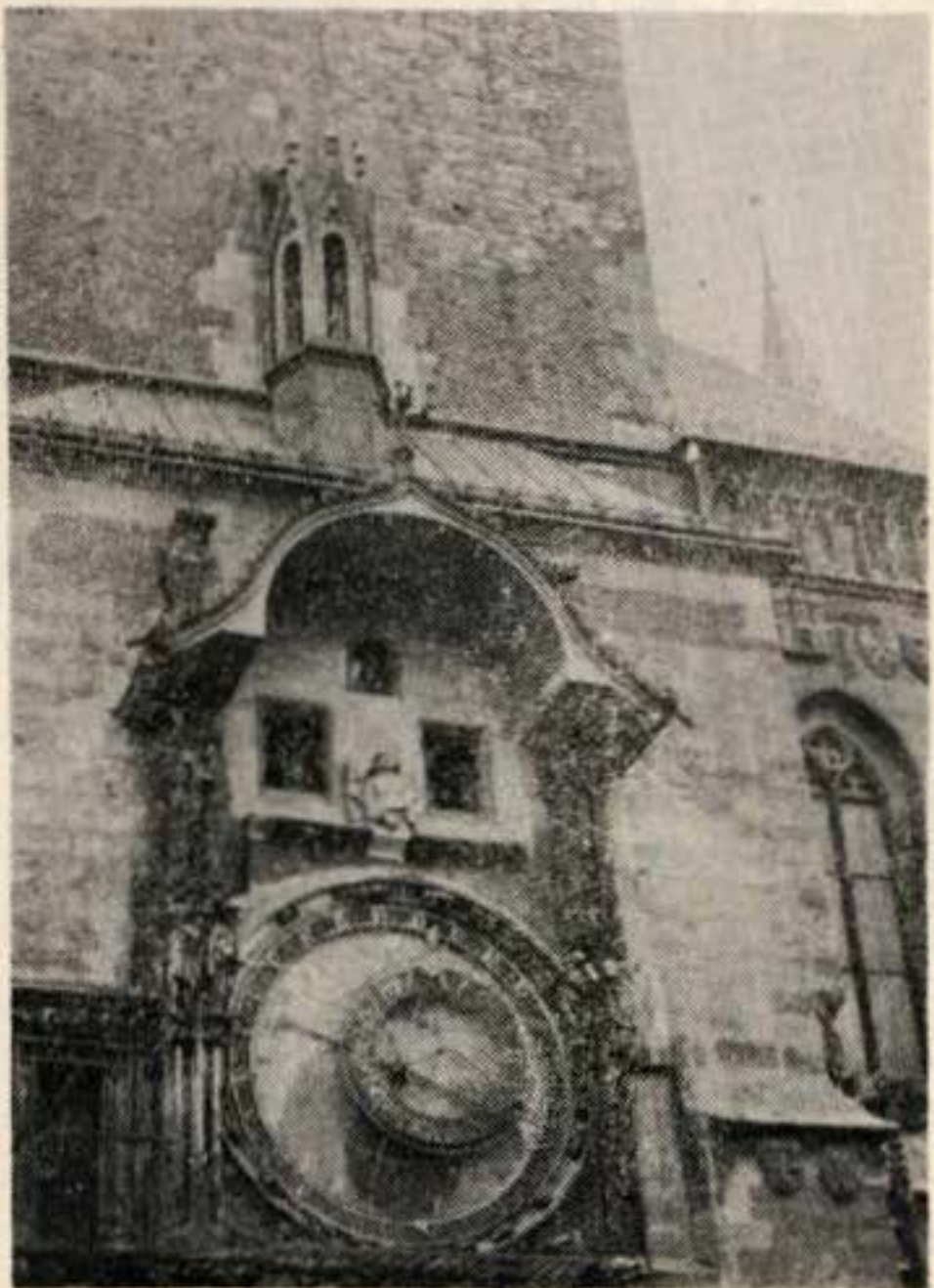
しかし、このブラハは今日決してボヘミヤの夢の都ではない。フラツチャニ（城）広場を起点にこの城内を見学するなら、かつての貴族的宗教的な国家の遺産はすべて今日では人民の手に委ねられていることを知るからである。第一にこの九世紀以来代々の王たちによって相ついで増築されたブラハ城は、現在スボボダ大統領の官邸となっている。邸内のテラスの一部は月に一回大統領と国民とが直接に話し合う場となっていて、小さな椅子が沢山おかれてあった。また城の周辺

に建てられたルネッサンス時代の貴族の邸宅は各国大公使館にあてられ、その他の堂々たる歴史的な建築物も図書館、博物館として実用に供されている。しかし面白いことには、この広場に面してすぐ城と近い一角にある昔のカトリックの大司教の宮殿は、今もそのままブラハの司教の住居に使われている。これは、かつてこの国と宗教とが密接した関係にあり、今日まだその関係が複雑で微妙なものであることを語っている。

さて、代々の増築によって城の懷に抱きこまれるように、城内の中庭にそびえたつのが聖ギイ大聖堂である。

「ボヘミヤの王の王」として、中央ヨーロッパに一大文化の栄光をもたらしたカール二世の発願によって建てられたこのゴシックの大聖堂は、今世紀の三十年代にようやく完成したという。私たちが訪れた折しも、このほのぐらい聖堂内には妙なるオルガンの音が響き、中央一際高い内陣では司教自らの手によって結婚式が行われていた。美しくもおごそかに式はすすめられていったが、決して華やいだ雰囲気とはいえなかった。やがて司教に続いて気品のある若いカップルが内陣を降りて、聖堂内右手の壁面にはめこまれた銅版の人物像の前で祈りを捧げた。聞けばそれはこの新郎の遠い祖先にあたる貴族の墓所であって、ここに司教

Ⅱ旧市庁舎の時計Ⅱ



が祈るのは一般には異例なことだそうである。私たちのために、とくにブラハ市内のガイドをされた婦人は、法律学の博士であったが、彼女はほとんど目に涙をためて、チェコ自由化の運動が始って以来、初めてこのような大きな宗教的な結婚式が許された喜びを隠そうとはしなかった。そしてこの貴族の直系の子孫は今も国外にあって貧しい生活を送っていることもつけ加えた。二十一、二才のこのういしい青年の横顔に私は思ひなしか憂愁の色の秘められているのを見た。

貴族と宗教と革命と、そして自由。この図式について今ここで何かを論じるべきではない。しかしこのプラハ城の近く、ノートル・グム・ロレット教会内にある宝物館で、結婚衣裳一面に縫いつけたダイヤモンドをつかつて作ったという聖体顯示台（ミサのための道具）を見たとき、それがまたとないほど豪華で、たしかに信仰に輝いているとはいえ、口では讃歎の吐息をもらしながらも私の心には空しいものと映った。これ一つではない。王冠であれ、剣であ



Ⅱチン（砦）の教会Ⅱ

れ、この国の特産である水晶やガーネットをふんだんに使い、金銀宝玉に贅をつくしたもののすべてが、すでにどこかに革命の萌芽を宿していたのではなからうか。それなら、十八世紀以来あるときはオーストリーの政權下に屈し、またつねにドイツの脅威におびえてきたこのチェコの国民が、現在共產圏内にあつて果して幸福な日常を送っているのだろうか。それは――

短時日に垣間みた旅行者にたしかめられるものではないけれども、ごくわずかながら私の目で耳で知りえたことは、自由が何を意味するかという問題である。

まずチェコ国内に入ると同時にチェドツク（チェコ国立交通公社）から派遣されてきたもう一人の通訳の婦人の口から、統制という暗い言葉を聞いたとき、自由経済の国からきたものにはいささかの驚きであった。彼女は始めに、もしおみやげを買うなら値段は統制されているのだから、大きな店で買うも小さな店で買うも同じであると注意した。その後、ホテルの食堂で同席したとき聞いた話では、肉類はいまだに統制されていて、買うには長い行列、それも一週に一度も食べられぬこともあるという。そしてこんなに豊かな食事をするのは、このような仕事のあるときだという。この婦人は六十才ぐらい、ご主人は技師で国家公務員だそうだが、品の悪

Ⅱ旧市庁舎の広場後ろがカール大学への道Ⅱ



いことに、ホテルの食事に真先に手をつけ、いうなればガツツイでいて、ちょっと気の毒な気さえした。ところがその食事も決して上等とは云えない。ヨーロッパではナプキンのよしあしによってだされる食事の程度も、従ってお値段もわかるといわれているがこの国ではついに一回も布地のナプキンにお目にかかることもなく、ひどいときは紙ナプキンを二つに切って使ってた。

そしてサービスの悪さはレストランにかぎらず、店の売

子も電車の車掌も同列である。人びとは決して怠惰ではないけれども、「やる気がない」のである。なぜ？ 答えは「いくら働いても同じだから……」

この誠意のかけた国民意識の底流に癖易させられるのは、私たち旅行者ばかりではない。一番怒るのはチエドックの通訳で彼女は二言目には「共産主義になってからは——」とか「共産主義になる前には——」を繰返していた。

ちょうどソビエト軍侵入の満一年の記念日を旬日にひかえて、思ったよりも平静なブラハの街に安堵しながら、私たちは出発の前夜、ペンセスラス広場へと散策に出た。両側に広い並木のあるこの広場は国立美術館にむかって、やや上り坂になった大通りといった方がふさわしい。その美術館近くに建国の偉人聖ベンセスラス王の像が建っている。その像の台座の前には思い思いに花が供えてあった。チェコ自由化を叫んでソビエト軍に抗議し、ここで焼身自殺をとげた青年ヤン・バラクのために。そしてその台座のみかげ石には、はつきりと青年を包んだガソリンの炎のあとが残っていた。これがこの国の自由をかちとるための、現実の代償でもあるかのよう。

信仰とは認許澄浄であると云われるが、信仰に生きるものの喜びは、日に日に新たに恩寵に遇う身の喜びを受取るところにあるのではないだろうか。大いなるみめぐみに生かされて居ながら、不幸だと歎いたり、不運だと愚痴ている私だが、気付いて見ると、不幸どころか最悪の不運と愚痴ていた事すら、大いなる恩寵の一つであつた事に喜ばれる事がある。

法然上人がみ歌に、眺むる人の心にぞすむと詠ぜられ、御法語にも認許と申すが、即ち吾手に得たる心地にて念仏は申すなり、と決定心を強く教えられているが、決定の信ナムアミダ仏の日暮しには、凡夫の故として不平も不満も愚痴も起るであらうとも、それすらの煩惱も朝の陽光に輝く室内の塵埃の如く美しく浄化されるものではないだろうか。

私達の日常の出来事に何一つ無駄であつたり不運とか損とかがあるのでは無く、只その当座のつまづきから愚痴るもので、月かげの至らぬ里はなけれども、の歌の如く、み光りのお育ての中にある一つ一つではないだろうか。今年の元朝も厳寒の雪道について沢山のお詣りがあつたが、私は同信と共に夜明けまでひたすらにお念仏を称え、新らしい年を迎えさせていただいた感激とこの一ト年もすべての人々と共にみむねのままに過すことの出来る様にと念じたのだが、数多くの

信仰は 光明摂取の喜び

＝ 岩手県花巻・松庵寺住職 英川金小 ＝

英 川 金 小

お詣り人はそれぞれに願いと祈りを捧げた事と思う。今ここに生かさせていただいているしあわせを受取ることが出来得ず、只己が慾望と願いを祈ることのみであるならこの一ト年はおろか明日も明後日もしあわせの喜びは来ぬものではないだろうか。今ここにつつまれているみ光りを身にしっかりと受取る所に信仰者の喜びがあると思う。

旧臘知人の独り息子が交通事故で亡くなったと聞いて弔問

した。昨日葬式を済ましたと云う日であったが、只々両親共に泣いていて慰める言葉もなかった。廿一才になる息子が大型のトラックに側面衝突して無惨にも死んだと云うのである。

何んの罰でしょう一人息子を失うとは、と恨む様に云うて涙に目をはらしている。私は只静かに読経してその家を辞し、それから一週間程経て再び訪ねた。奥様は挨拶もそこそこに私に、「息子を殺したのはうちの主人です！ オートバイ等買うなどあれ程とめたのに買ってやったのは主人です。買わなきゃこんなことになるのでなかったのに、主人が息子を殺したのです」と云うのである。夫は困り果てた様にこの処毎日この様に私を責めるのです。勿論買ってやらなければこんな事故死はしなかったかも知れない。然しあの朝友達と山に行く伴に弁当まで持たして出してやったのは妻なのである。そんな事までして出してやらずに引止めりや死ぬのじゃなかった。息子を殺したのは妻なのだ。と互に悔しさの余り愚痴とは云え毎日毎日口喧嘩をしていると云う訳であった。私は喧嘩して責任をなすり合っていたとて生き返るものでもない、むしろ亡くなった息子を苦しめるだけなのだ、それよりも息子の為めにも仏壇でもまつってお経を手向けお念仏を申しなさいと云って持参した四誓の偈の訓読を三部置いてこの家を辞した。その後十一月五日再三訪ねた丁度満中陰の法

要を昨日済ましたと云う日であったが、以前に訪ねた時の様ななすり合いの雰囲気は微塵も無く新らしい仏壇の前に夫婦で座りこう語った。

私達は世帯を持って四十二年今日までおがむ場も無かつたし、勿論おがむことは無かつたが、この度息子の死を機縁に仏壇を用意し二人揃っていただいたお経を読みお念仏を称えました。息子が可愛くて気の毒で、可哀相でせめていい処に行ける様にと夢中でお念仏を称えました。ところがこの頃何かしら、こちらの方にささやか乍ら何んとも云えぬ有難度さがこみ上げて来る様になり、息子と共にいい国に向っている様な感じがして来るのです。今になって思うと四十二年間仏壇もなきまま私共親子は手を合すことも念仏申すことも知らず、只その日その日の営みと子供の成長にのみ心をうばわれ人生の大事なもののほんとうの尊いものも知らずにすごし、すごさせて来ました。この度この愚かな親のかたくな心の扉を開かせん為あの子が大きな事象を示してくれたのではないのでしょうか。愚痴るおがみでなく息子否仏様を本当におがめる様になりました。ありがとう御座います。

と長い時をかけて信仰に生きて来た方の言葉を聞く様な尊いこのことを耳にし、遂三人で泣き乍らしばしば念仏を申しました。

可哀相だ、気の毒な奴だと、せめて供養してやらねばと気の毒な者へ手向ける気持ちのお念仏が逆に六〇余歳の闇を打破ってくれた、尊い息子否み仏のお導きとナムアミダ仏した時、仰ぐみ仏のみ姿の中に息子を見ることが出来たと云うのでしょう。

私は今更の様にナムアミダ仏の念仏にしかと身に受けるみ光りと力を再確認しました。更にこの夫婦にかつて他に縁付いていた娘達夫婦と子供がこの家に帰り婿に来ることが決まり二重の恵みの訪れを待っている。

更に又十一月十二日の出来ごとであるが家内がハワイに居る伴へ旅行中、留守の台所に立って不慣れた仕事をして一寸としたはずみで眼鏡を流し台に落し鼻当てのところから真二つにしてしまった。幸い玉は無疵であったが眼鏡としては使用不可能となった。以前に使用した眼鏡がある筈だと思って探したが見当らず、当惑してしまった。早朝の出来事として何んともならず、朝食後に眼鏡店で直して貰い、約束の用事之間に合せる事が出来た。眼鏡が無くては用のなせない私は飛んだ失敗をしたと思った。然しこの失敗によって幾つかの幸せを知らされた。大事な玉が無疵で助った事、用が無くなったと粗略にあつかっていた非を知らされ、そして毎日眼鏡のお蔭を蒙っている事を忘れて粗末に取扱っていた愚を知らさ

れ、更にその目がねの奥に六十有六年文句も云わず働いてくれていた目玉さんの有難度さをしみじみ感じました。眼鏡の破損はたしかに不都合であったが、その不都合によって目がねでは見えない尊さを見せて貰った。

私の身の廻りに起る種々の事象その折々一つだに無駄であったり、損であつたりするものが無い事をこの二つの事によって今更の様に心から身に知らされた。

十二月八日成道の前夜幾多の悪魔が釈尊に邪魔をしたがそれらの矢も石も釈尊のみ許には花となって散ったと云われ、法然上人は老境の流罪をも朝恩と拝して辺鄙の境に去られたのだが、これ等の心情は善意に解釈するとか受取るとか或は心の持ち様などと云う世人の考え方とは全く違ったもので過飾でも、誇張表現でもない。真に心の奥から喜ばれ、受取られたものであつて、なればこそ身心歡喜の躍動はなさずに居れない奉行即ち歡喜奉行となったものと思う。野に咲いている花にも頼ずりし、道づれの人にも心を寄せる心情は単なる道德や感情だけでなく信仰から生れ出る一切を浄化するみ光りの賜であり美しさであり喜びなのである。花は美しい。それは色、形もあろう。然しそれよりも、花と咲いた奥の奥の長い時間の今を眺める時、殊更に美しく、うるわしさを深めるものである。



前田繁子

(滋賀県阪田郡伊吹村在住)

泣かずに泣いた私

「泣く子は親のうけとり」と、昔からいいますが、このたび、私五十五年振りに親家へ帰りました。親こそは、泣く子も泣かぬ子も隔てなく、みんな引きうけて下さるものだ、と、つくづく親と先祖のお慈悲に、泣く子となったのでございませう。そしてわが子程貴い宝はない、ということもしみじみ味わい、感じ涙にむせびました。

生家は荒れ、雨漏り土蔵は壊れかかっており、見るも朽ちはてた状態になっていましたが、その屋根に、天井に、柱に、すすぼけた壁に、破れた障子に、敷居に、土台に、土に先祖の手の跡が、汗が泌みついている。私は天井を眺め、柱をさすりながら、高橋家の香りを味った。そしてそれが私の心身に流れ解け込んで働いているのだと、感慨無量で幼い頃のことを、つぎつぎと思い出さずにはいらなかった。(只今はすっかり修繕されました)

一步屋外に出れば、一三七七米の伊吹の霊峰が雄然と聳えている。冬は白衣に、春夏は花畑、秋は綴錦の衣を着て、麗の繁る森林からは渾々と清き泉の湧き溢れ、冬温く夏はつめたく私共の心身を清め育んでくれる。

古里のつきせぬ愛情に唯々合掌のみ。私は明治三十三年、この家に生れ、十四才の時只今の名古屋市立向陽高校に入學、十九才(大正八年)で卒業。姉婿のすすめで、月十三円の小学校の教員をつとめ、二十一才で、滋賀県八日市西蓮寺住職前田氏に嫁し、二十二才で長男(竜海)、二十五才で長女を出産、同年丹後の宮津町大頂寺に転住、昭和八年津市天然寺に転住、二十年七月戦災により全焼、二十三年三月前田住職遷化、同年森山僧正の就任、三十四年八月市内法花院に転出、四十四年七月五十五年を経て帰郷。

扱てこうした落ちつかぬ、転々とした人生行路ですが、幼

稚な拙文であそこ、ここを綴ってみました。

寺院生活に入るや、直ちに前田住職より言い聞かされたのは「わしはそろばんをはじくことは知らないが、寺に生活する者の仕事は布教である。その心構えは入忍の一字、この世は忍土ともいわれているのだから、そのつもりでやって欲しい」と。

承って、よく考えると全くむずかしいこと、然しやれることからというので、早速布教のはじめは小さい時からが大事、日曜学校を開校しました。はじめは少数でしたが、だんだん沢山子供も集り、宮津の大頂寺では男女合せて百人以上も集りました。父兄も大喜びで、日曜毎にお菓子・果物のお供えがあり、帰りにはご褒美としていただきます。こうして父母の協力を得まして、大変楽しい日校でした。住職も十六ミリの映写機等求めて、フィルムは朝日・毎日新聞社等から貸りて、とても熱心でした。津の天然寺へ来ましてからもずっと各院の協力を得て盛大につづけられました。戦災によって堂宇のない時、焼け残った百日紅の木影で少人数でも集って、月影の宗歌・仏の子供・お話し・三唱礼と簡単ですがつづけました。その頃は皆焼けていますので協力者もなく、大方一人でしたが、暫らくして三重大教育学部の学生さんが一、二人手伝って下さるようになり、子供も私も大よろこびで、

ぼつぼつと活気が出てきました。

次に忍の字の功德、これは前田方丈自身が示されたのではないかと存じます。と申しますのは、昭和二十三年三月六日掌を開いり握ったりして「死期が近づいた、死期が近づいた」と繰り返えされました。私は「まだ早いですよ」と申しますと、「そうはいかぬ」といわれました。でも別に気にも止めなかったのですが、三月二十日午前十時信徒総代の田中家先祖代々の彼岸の回向で、阿弥陀経が終り回向がすみ、願以此功德と共に横臥されました。一同驚き、直ちに医師に診断をしていただいたところ、脳溢血で半身不随、絶対安静にといった、リンゲル注射をされました。翌日も又翌日も何の反応もなく高い熱が二日続きましたが、三日目からは静かな熱でした。医師は時間の問題ですから、といって帰られました。こんなにも早く死というものは訪れるものか、ほんとうにどうしようもなく逃れることのできない現実、今当面しているのかと何度も確めました。やはり迫ってまいりました。二十三日午前三時三十分、親子三人に守られ、静かな念仏のうちに心臓の鼓動はピツタリと止まりました。暫く無言のまま腹の底から「ありがとうございます」が繰り返され、悲しみの中から「よくも」大往生らしい「往生を遂げて下さいました」と喜び慰め合いました。お悔みに来て下った人で

「前田方丈は死んで物をいわれた」と仰言って下さった方がありました。檀信徒の方々が「もう一度拝ませて下さい」といって、代る代る安かな笑みを浮べた麗わしい相好を拝んで下さいました。

後住には二十三年、森山僧正が就任下さって、本堂再建問題・墓地移転・十三号台風等々と難問題がいくつもありました。

昭和三十四年、私は法花院住職上村法尼のお言葉に甘え、同居生活十年を経ました。この間、本宗から授けられた教師補の資格を生かして、全日仏尼法団の准団員として認められ、法団の事業「はちす会」の運営・企画等の補助役として働かせていただき、又法花院の社会教化運動の「保育園」のお手伝いをして、誠にたのしい生き甲斐ある十年間でした。

今一つ忘れることのできないのは、昭和三十九年法団本部主催の「沖縄戦跡巡拝団」に上村法尼のお勧めでお共したことです。十一月五日羽田を米機ノースウエスト号で出発、二時間半那覇空港に到着。翌日は姫百合之塔・健児之塔・黎明之塔・万魂之塔・米司令長官バグナー中将之塔、その他沢山の塔がありますが時間がないので、大典寺での法団主催の日米流の戦没者合同慰霊法要に参加させていただきました。翌日は米軍基地・ゴルフ場等見学。翌八日、全日空で伊丹を経て羽田に帰りました。

なにしろ大東亜戦争本土決戦を小さな島で食い止めたのですから、沖縄住民こそ全く悲惨な犠牲となっていたのだのです。日米軍で二十八万余人、非戦闘員は数知れず、又赤ん坊まで親が殺さねばならない悲しいお話を遺族の方々から聞き、全く涙止めどなく流れ、胸が痛みました。

その後五カ年を経て、やっと七十二年に本土に復帰されることになりました。どうぞ平和にと祈らずにいられません。

以上の如き大体の五十五年間を通じて、たえず励ましお育ていただいたのは、元祖法然上人様のお言葉です。苦しい立場に至った時は「われたとい死刑に処せらるるとも、この言いわばあるべからず」との仰せ、又ご流罪の時「朝恩なり」とお受けになり「念仏の声なき所に念仏を」と仰せられ、又私自身住む家なきこの身は、と思うとき「念仏の声するところ、これ皆わが遺跡なり」と仰せられしを思い起し、そうだ、「如来さまがよくして下さる」と元祖さまに励まされて、生かさせていただいてまいりました。

わが子と別れて、一人生活すとも、法然上人の御母君さまのご心境を拝察申上げて、私などは勿体ない、ありがたいと、お念仏、合掌のみ。浄土宗に御縁結ばせていただき、幸福と誇りを持って感謝いたしております。

《念 仏 生 活》



五重相伝のお話し (三)

藤 井 実 応

(一) 「授手印」御製作の由来

聖光上人が「末代念仏授手印」を著作された由来は、その序文に明らかに示されています。

「その一節に、幸いなる哉。弁阿、血脈を白骨に留め、口伝を耳底に納む。……上人（法然上人）往生の後、その義を水火に諍い、其の論を蘭菊に致して、還って念仏の行を失い、空しく浄土の業を廃す。悲しい哉、悲しい哉、何んかせん、何んかせん。……肥州白河の辺り、往生院の内に於て、二十余の衆徒を結び、四十八の日夜を限って、別時の浄業を修し、如法の念仏を勤む。……弟子が昔の聞きしに任せ、沙門が相伝に依って、之を録して留めて向後に贈る。仍って末代の疑を決せんが

為、未来の証に備えんが為に、手印を以て証と為して、筆記する所左の如し。」

この文に明かなように、宗祖滅後、早くも門下に種々の分派を生じ、邪義や異流もできたので、宗祖より面授相承の正派を後々まで伝えねばならぬと至誠こめて記録せられたのがこの書であります。授手印とは、手の印を以て授けるといふことで、手印は、わが国古代から行われていた方法で、手印は世界万人これを真似ることはできぬ確かなものであります。一枚起請文にも両手印を以てすとあり、玆に手印を以て証拠として相伝の教えを筆記すと述べられたのであります。（最後の伝法の時に、授手の作法があります）

次に正説分

(一) 総 説

授手印には(一)五種正行(二)正助二業(三)三心(四)五念門(五)四修(六)三種行儀の六重(それを詳しく分けると二十二件、五十五箇の法数)と奥の図とあつて、浄土宗義のすべてが述べてあります。順次これを説明しますが、この教えをまとめて、私の心の中に何が残るかというに、阿弥陀仏の本願を信じて、南無阿弥陀仏と申すという、念仏の一行に帰するのであります。仏教は本来むつかしい哲学や学問ではありません。誰でもが実行のできる宗教であります。「行」の中に即ち実践の中に、身につくものなのであります。それでこの二重をまとめて「行」と伝えるのであります。初重によつて自身を反省し、助かることのできぬこの人間を、二重の南無阿弥陀仏のみ法によつて必ず光明の世界にお救い下さることを明にするのです。即ち二重は一切の人々の救われる実践道——南無阿弥陀仏の念仏一行——を伝えるのであります。

念仏は文字通り「仏を念ずること」であつて、仏教徒として仏を念ぜぬものはありません。仏を念ぜずして仏になることはできぬ、仏を念ずることによつて仏になれる。まことに念仏は仏教の根本義であり、仏教実践の中心をなすものであります。

釈尊が成道せられた時、天地に充ちている法(天地ありのままのはたらき、真如、実相、永遠真実の生命)と一体の境地となられ、法に合掌し、法を念ぜられた。(法を見るものは仏を見る)、この釈尊の成道が、念仏念法の起源であり、念仏の教えの根元であります。

念仏には仏陀釈尊を念う念仏もあり、仏のお徳を念じたり、仏のおすがたを念ずるもあり、仏のみ名(十号)を念ずるものもある。或いは南無仏とか、南無釈迦牟尼仏とか口に称える念仏もありました。大乘仏教になつて、菩薩の願行や、仏の大慈悲活動が明かにされ、浄土三部経によつて、南無阿弥陀仏と口で称える念仏によつて一切の人々が救われることが明かにせられました。

(二) 五種正行と正助二業

念仏者の心の置き方を安心あんじんといい、その宗教的な実践行を起行きぎょうといひます。安心が眼なら起行は足です。安心は発心はつしん、起行は修行ともいえます。眼と足とそろって、目的地へ達することができ、即ち安心と起行とが具足して、極楽に往生しやうじすることができ、その起行に五種の正行しやうぎやうがあります。

一、読誦正行 専ら浄土三部經を讀誦する。

二、礼拝正行 専ら阿彌陀仏を礼拝する。

三、觀察正行 専ら阿彌陀仏及び極樂を心に慕い、憶念する。

四、口稱正行 専ら南無阿彌陀仏と口に稱う。

五、讚歎供養正行 専ら阿彌陀仏を讚歎（讚仏歌、礼讚、詠歌）し、供養（花、香、水、灯等）する。

この五正行以外の諸經を讀誦したり、諸仏諸神を礼拝供養したりするを雜行ざぎやうとして捨て、専ら正行を修するのです。正行の中でも第四、口稱正行は、阿彌陀仏の本願にかなう行であるから最も大切です。口稱正行によって往生は正しく決定します。それゆゑこれを正定業しやうじやうぎやうといひます。他の四正行は念仏の助業じよぎやうといひ、これはその人に

応じて適當に修するがよい、できない人は修しなくてもよろしい、ただ正定業の念仏は専ら修せねばならぬ往生の業ぎやう（行為）であります。五正行は要するに南無阿彌陀仏の口稱に歸一します。あれもこれもと所謂雜行をしていては、なかなか目的地に到達することはできません。專修一行南無阿彌陀仏となりてこそ、速に生死まふしの世界を離れることができます。

前述の浄土三部經とは、無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經の三經であります。無量壽經には、阿彌陀仏が法藏菩薩であられた時、四十八の本願を建てられ、長い間の修行によりそれを成就して、阿彌陀仏となられたことを説き、人々がその本願力を聞き仏の名号を称えて、よろこんで一声でも称名すれば極樂に往生し、仏になることができる旨説かれています。

觀無量壽經は家庭悲劇に苦惱するイダイケ夫人の請こいに應じて、釈尊は阿彌陀仏及び極樂の尊い相を説き、如何なる愚惡の人も、罪を犯せる人も、一切の人々が南無阿彌陀仏と申す念仏により往生のことができることが述べてあります。

阿彌陀經は、阿彌陀仏及び極樂の莊嚴と、一心に弥陀の名号を称えることにより往生をうることに、六方の諸仏はそれを証明し、念仏者を護念したもうことが説かれています。

この經説に基いて淨土教は開かれたのであります。念仏者の読誦すべきは、この淨土三部經であります。

さて、念仏の教えに初めて入られる方のためにこの三部經に説かれている阿彌陀仏及び極樂に就て、一言つけ加えて説明申上げておきます。

阿彌陀^{あみだ}・極樂^{ごくらく}について。阿彌陀仏とはいかなる仏でしようか。阿彌陀仏とはもと梵語で、阿彌陀とは無量、仏は覺者^{さとしもの}と訳します。阿彌陀仏は無量壽（永遠の生命）と無量光（無限の光明）に在す仏（覺者）であると經にあります。換言せば全時間（無量壽）全空間（無量光）、即ち全宇宙に遍満して生きとし生けるものを刻々光の中に攝^{おさ}めとり覺醒せしめ、さとの境地にみちびき下さる仏であります。その仏の住せられる境地、世界を極樂という。法然上人は「涅槃の城^{みやこ}」と申され、善導大師は「極樂は無為涅槃界なり」と説かれた。涅槃とは滅と訳し、煩惱

の滅したさとの境地を申すので、釈尊が正覺を成じて、仏となられたその境地が涅槃であります。常住真實の世界、煩悩のない平和な境地、阿彌陀仏の住したもう世界、それが極樂淨土であります。

私共はこの世に於て盛衰・成敗・勝負・褒貶・損得・愛憎等にとらわれ血眼になって走りまわっているが、思えばみな滅びゆくことばかりで、これを仏教で有為^{うゐ}と申しています。やがて死すべき身が、このような滅びゆくことにのみ懸命になってどうなることでしょう。私共人間として生をうけたからには真實にして滅びない永遠の世界を求めずにはおられませぬ。「有為の奥山今日越えて」と、いろは歌にあるが、この有為をのり越えたところに「無為涅槃界」があります。これに到達することが人間の根本の願いで、そこが人生の帰還するところでもあります。極樂は西方十万億を過ぎた処にあるというのは、西方は日も月も万物の帰入する方向です。これを信仰の上からいうと、人生の帰還する方向、それが西方の意であります。十万億を過ぐとは現實濁惡の世界をはるかに超えた世界を意味します。しかし念仏の一声に十万

億の世界にゆきかやうことができるのが念仏申す人の実践するところです。観無量寿經に極樂はここを去ること遠からずと説かれた所以であります。

往生極樂は淨土教の目的であります。往生とは文字通り「往いて生れる」或いは「往き生きる」で、極樂涅槃の世界に生きゆくこととあります。今の一声一声が極樂に生きる道であり、一声一声に仏の大悲光明の攝化おそだてをうけることができます。光明の攝化をうける光明の生活と、往生極樂とは不二の関係ですが、現世に於ては光明攝化の生活、臨終に往生して究竟成仏すると、古人も一応分けて述べておられます。

選。択。本。願。の。念。仏。 一声の念仏に光明攝化をうけ、極樂に往生のできるのは阿彌陀仏の本願に依るからであります。本願とは阿彌陀仏の根本の願い、大慈悲のはたらきそのものであります。無量壽經に詳しく述べてあります。が、あらゆる諸仏の淨土から選択されて建てられた本願で、その願成就して阿彌陀仏となられ、極樂淨土が建設された、これゆえ阿彌陀仏は「威神光明最尊第一の仏」諸仏統攝の仏の中の仏であり、淨土は超勝独妙の眞實報

土であります。本願の中で第十八願は王本願といわれ、念仏往生の願といわれます。即ち「われもし仏と成らば、十方の衆生わが名号（南無阿彌陀仏）を稱すること、下、もしは十声、もしは一声申さん衆生、若し我が淨土に生れずばほとけにならじ」と。經に、本願はすでに成就して、「今現に在して法を説きたもう」と。阿彌陀仏は今現在說法の話けるみほとけであります。われらはこの本願を信じ南無阿彌陀仏と申せば必ず極樂涅槃界に生きられると念仏申すのであります。念仏は阿彌陀仏の選択したもうた行で、だれでも、いつでも、どこでも稱えられるから易行で、その名号の中に仏のあらゆる功德がこもっている勝れた行であります。阿彌陀仏の本願力は、今現にここに、私共の救いの力として働きかけて下されている。私共は御名を称えてその攝化おそだてをうけるのであります。かくて一声一声に阿彌陀仏本願の光明攝化を頂き、この世に於ては光明の生活をなし、最後臨終には全く光明におさめとられ、極樂に生きて、やがて仏と成ることができ、念仏の信は実にこの世及び後の世の救い、即ち現在只今から未來永遠の救いがあります。

「小消息」の御法語に学ぶ 〽三〽

三 信心を確立する

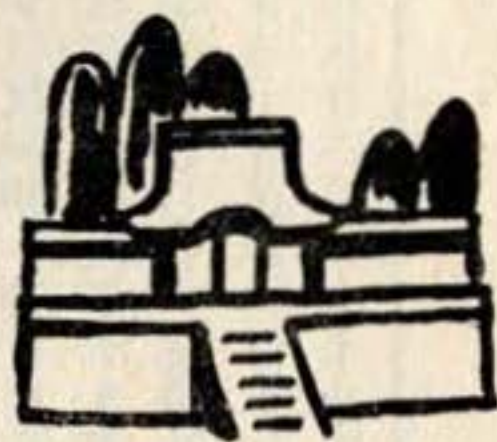
信心には二つの面があり、前項に述べたところはその中の機きの深信じんしんの面、投げ出された自分のありのままの姿を知ることであつた。ここではもう一つ大切な面、法の深信について示されている。いかなる教法を信ずるか、その内容は善導大師の説であらわせば、(1)所求しよくと、(2)所帰しよくと、(3)去行こぎやうの三をもつて明される。(1)は私どもが理想として願ひ求める浄土を西方極楽浄土、(2)本尊として帰依する仏を阿弥陀如来と定め、(3)この穢悪な世界を去つて清浄な仏国にゆく行は、念仏一つに帰する。これは浄土宗のおしえの肝要をあげたものであり、また浄土宗の

安心すなわち信心のあり方は、浄土と弥陀と念仏に心をしっかりと安立することである。

十方に浄土おほけれど、西方をねがふは

十悪五逆の衆生の生るる故也

大乘仏教の信仰では、十方に多くの浄土があつて、皆おのおの仏がましますとされる。アシニク如来あしにくの妙喜世界みょうぎ、ルシヤナ仏の蓮華藏世界れんげざう、大日如来の密厳浄土、薬師如来の浄琉璃世界などそれぞれ特有の意義をもつて成りたっている。阿弥陀さまの極楽浄土は、本来すべての生きとし生けるものを来生させることを誓われて、構えられた浄土である。この事は浄土三部経ばかりでなく、かず多くの經典に説くところもみなこの意味を離れてい



—大正大学教授—

小 沢 勇 貫

ないので、もっとも明白に言えることである。浄土往生ということとは、アシユク仏国経、随願往生経にもその説が見えるが、前者は一般の菩薩道をおしえ、後者は十方浄土の往生を説くもので、いずれも凡夫の救済を本意とするものではない。また極楽浄土には観無量寿経によれば、五逆を犯し十悪を作った重き罪業の人が、臨終に廻心念仏してなお往生することが説かれる。これは諸仏の浄土に絶えてなき、弥陀浄土の特色としなければならぬ。

諸仏の浄土多き中に、西方極楽浄土をえらんで願求するのは「十悪五逆の衆生の生きる故なり」と示される。

父母を殺し、師を害し、仏身より血を出し、教団の和合をやぶる五逆の大罪は、大経説法の時には未だなかったので、釈尊はあらかじめ抑止して除外せられ、観経においては阿闍世の逆罪もあって、生物を殺し盗みをするなどの十悪の人と、また五逆の重罪のものも、み仏のかぎりなき大悲に救われて往生すると説かれているのである。

阿弥陀さまの浄土は何ゆえ西方なのか、我われが念じたり観じたりする方処をはっきり指向するためであるとか、西方は万物の終帰するところ、あるいは未来をあらわすとか、なお古来説明も行なわれた。また西方浄土の

経説が多くは素直に信ぜられたことでもあろう。観経に日没の処を觀する法が説かれているのは、おもいを西方浄土に及ぼしめるためである。人間の心の落着をおもわせる日没、万物の帰趣する西方と定められたことは、純真な宗教感情に由来するものであろう。ここにはそんな思惟や、指方立相などの説にもふれることなく、観経によつて十悪五逆のものの往生する故とお示しになっているのは、諸仏の浄土に見られない極楽浄土の特異性をあげられたのである。

諸仏のなかに弥陀に歸し奉るは、三念五念に至（る）までみづから來迎し（給）ふ故也

本尊として歸依する主体を、阿弥陀さま一仏に定めることを示されたのである。すでに願求する浄土を西方極楽と定めるならば、歸依する仏が、その浄土の教主阿弥陀仏であることは、理の当然である。しかも「三念五念」まで、この仏の真身が來迎したもう故とされる阿弥陀さまは四十八の本願を成就された仏である。本願成就とは、とりもなおさず救済のお力が今現にここにはたっていること意味するのである。光明かぎりなく、寿命量りなき仏身の成就をちかい、念仏者の往生來迎をちかう、それら一つ一つの誓いは悉くみな成就せられ、その

功德とお力が現にはたらいっているのである。

「三念五念」の語は法事讃にも見えるが、前にいう「一念十念」と同様、わずかの念仏をあらわすに外ならない。善導大師は自らの尊い体験から「応声即現」といわれた。み名をとえたる声に応じて、阿弥陀さまはその身を現じ、念仏の行者を導きたもう。観経には阿弥陀さまがその化身や菩薩方とともに行者を来迎したもうことが説かれている。これらはみな仏の方からはたらきをかけと申してよい。

諸行の中に念仏を用うるは彼の仏の本願なる故也

往生の行として諸善万行をいうが、その中念仏の一行をえらぶことを示されている。阿弥陀仏の本願に決定往生の行として誓われる故とされる。浄土往生の行は観経などに説くところは、たいへん広汎で多面にわたっている。善導大師はまずこれを大別して、正行と雑行の二群とされた。純弥陀浄土の行を正行として、これに五種をあげる。(1)もっぱら観経・阿弥陀経・無量寿経等の浄土經典を誦誦する、(2)もっぱら阿弥陀仏及びその浄土を観察する、(3)もっぱら阿弥陀仏を礼拝する、(4)もっぱら阿弥陀仏のみ名を称える、(5)もっぱら阿弥陀仏を讃歎供養する。その余のさまざまな行を雑行とする。さらにこの

五種正行につき、主伴の關係にまとめて、正定業と助言の二種とする。一に(4)の称名正行は、阿弥陀さまがその本願に誓われた行であって、主体をなすものである。「一心に専ら阿弥陀仏のみ名をとえ、行住坐臥の四威儀、いかなる時いかなる処でも、称名の相續を忘れないのを、正定の業と名づける。み仏の誓いの御ところになう故である如来が無量の諸仏の誓願の中から正しく選び定められた行業であり、また我われ衆生にとって、決定往生の行業である。この意味から正定業と名づけるのである。二に称名の外の誦誦などの四種は、称名の行を助成するものとして、助業と名づけ伴とするのである。大師のこのような行のふるいわけ、特に一心専念等の文字は、実に法然上人が開宗のよりどころとなったものである。

上人は称名を本願の行とされた上に、なお仏の選択にかかるものと確信され、勝劣、難易の二義をもってその意を試論されている。第一には阿弥陀仏のみ名には、仏のさとり功德も救済のお力も、一切功德がこめられ、すなわち念仏の切徳は、余の諸行に勝れて絶対である。第二には、念仏の行はいつでもどこでもまた何人にも修し易く、すなわちすべての人びとに通ずる。

修し難い諸行を本願とせず、修し易き念仏を選んで本願とされたのは、平等の大悲によるのである。念仏の選択ということに、み仏の大悲のこめられた深いみ旨を味われたのである。

四 救いの船に乗る

いま弥陀の本願に乗じて往生しなんに、願として成ぜずといふ事あるべからず。本願に乗ずる事はただ信心のふかきによるべし

「いま」とは、おしえを聴聞することのできたただ今、ありがたい機縁にめぐまれた即今、「我今見聞し受持することを得たり」と経文にある中の「我今」である。信仰にふみきる自覚をちぢめているわけである。この段は『観経疏』に信心を説く中、「本願のお力に乘じてかならず往生することができ」といい、また信心の内容を三心として詳説する結びに「三心さえ具わっているならば、いかなる行も成就せぬということがない。願い求める心と念仏の行とよくそなわって、往生せぬという道理はあり得ない」とある文意によったものと拝されるものの用にたつべくもない私どもの信心念仏によって、浄土往生の大事をとげ得ることは、仏の誓いのお力

が強縁となるからである。ミリンダ王問経に、小石は水に浮ばないが、百車分の岩石も船に載せたならば水に浮ぶといい、一度でも仏を念ずれば天上に生れることを教えているのは、浄土の信仰から見て興味ふかいことである。たとい罪業おもくとも、本願の船に乗れば、生死の海に沈むことなく、かならず往生することができ。本願の船に乗ることは、信心の深きによることである。『一枚起請文』に「ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申してうたがひなく往生するぞとおもひとりて申すほかには別の子細候はず」と仰せられてあり、また『浄土宗略抄』には、「心の善悪をもかへり見ず、つみの輕重をも沙汰せず、ただ口に南無阿弥陀仏と申せば、仏のちかひによりてかならず往生するぞと決定の心をおこすべき也。その決定の心によりて、往生の業はさだまる也」と叙べておられる。こうした上人のお言葉によると、念仏することによって必定往生すると思いとること、この決定の信心が、浄土往生にもっとも大切な要件であることを知るのである。浄土宗の信心のあり方その内容は、まことの心・深く信ずる心・往生をねがう心の三として説かれるが、小消息の御法語は、深く信ずる心を中心とするお導きである。

Ⅱ百済観音像Ⅱ法隆寺蔵



心の仏

本山 順子

(長野県須坂東高校生)

いかるがの百済ほとけのみ心は

わが心にもつねに住みたり

「奈良と京都、どちらが好きか」と問われたら、私は「奈良」と答える。また、「一番好きな仏像は……」と問われたら、即座に「法隆寺の百済観音さま」と答える。この仏さまこそ、それほどまでに、私の心をとらえるのである。

一日中、いや毎日向かい合っているだけでも私はあきないだろう。心さえ通じ合うような気がして、ますます私から離れることのできない仏となると思う。ところが、ある友人は百済観音さまについて、「確かに素晴らしいと思う。髪の毛にしても、薄い衣にしても、昔の人々の技術に目をみはるほどだ。あんなとこ

ろまでと思う部分にまで細かな細工が施されている。長身な中に程よい調和もみられる。でも、あのお顔は以前漆や金箔が塗られていたんだろうが、きたなく醜くどうしても好きになれない。」と語った。

私はがっかりした。髪の毛のあの細かな細工にまで注視し、調和もよいと語る人が、その仏の顔をきたないと言うのだ。「では、あなたの好きな仏像は。」と尋ねると「中宮寺の弥勒菩薩さま」と答えた。お顔がとても美しいからだそうである。確かにふくよかな、落ち着いた美しい仏さまには相違ない。しかし、私は百済観音さまにこよない魅力を持っている。

私が初めて百済観音さまにお会いしたの

は、五年も前のことだ。その時、私はこのみ仏の御前に立ちすくんでしまった感銘を、今でも忘れることができない。

なんて素晴らしい仏であろう。

私は何も語らなかつた。いや語ることができないのだ。なぜなら、口に出して語らずとも、このみ仏はすべて見通しておられたのだ。そのお顔に私の心をありありと浮かべられ、口もととはかすかに微笑んでいらつしやるのだ。そして、その暖かな眼差しは今も忘れることができない。

そのみ仏にまたお会いできるという日、私の心は、嬉しさに激しく鼓動していた。

法隆寺宝蔵殿内を回る時間は少ない。にもかかわらず人の歩みは遅い。半分いら立ちながらも、やっと仏の左斜めに立った。やや前にかたむきかけた御身体、細い指で持たれている水びょう、直角にさし出された右手、そして肩にたれる髪。

なんて長身で、美しい仏であろうか。

今、み仏は前に立って見上げている人々に、何を語り、その右手より、何を与えようとしていらつしやるのだろうか。

まず合掌をし、ゆっくりと目の前に立って
おられるみ仏に話しかけた。——こんにちは。
またここに参りました。——それから、ゆっ
くり頭を上げみ仏を拝んだ。五年前、初めて
お会いした時と変わらない慈悲愛に溢れたお
顔であった。今はもう漆などの上塗りも大方
はげてその名残りはほんの少ししか見ること
ができない。上にまとう衣服を脱いだ、いわ
ゆる『裸の仏』という感じがする。そしてま
ぎれもなく、十数世紀前の百済の仏像であ
る。まだ、海上交通の発達していない頃、荒
波を乗り越えて日本の土を踏んだといわれる
仏、そして日本人の心の中に侵透して、忘れ
ることができなくなった仏である。このみ仏
を、心をこめて作り上げた人は、一体何を託
したのでろうか。

前より成長した私を見ていただこうと思っ
た。すると、仏のお顔は優しい微笑でつま
れ、うなづかれたようにさえ思えてうれしか
った。
そして今度は、
「まだまだ道は長く、苦しいものです。でも
負けずに頑張るのですよ。」といわれる。
そして、み仏の細い右手が、私の肩に置かれ
たような気がしてはっとした。なぜなら、それ
は、あの母のような暖か味をもっていたのだ。
まだまだお話を聞きたかったが時間がな
い。私はまわりの人にせかされるように、御
前を離れた。しかし私は確かめるようにふり
返り、もう一度仏を拝んだ——さようなら
「さよなら。また会いたくなったら、いつで
も戻っておいで。でも、わたしは、いつもあ
なたの心の中にいることを忘れぬように。」
仏は笑を一杯にたたえて言われた。私はなぜ
か安心して、仏の部屋を後にした。満足感で
一杯になって……

み仏の優しき笑を拝しつつ
これよりわれはなにをかたらん
余りにもお話したいことが多い。まず、以

おられる眼、やさしく閉じられた口もと。なん
て素晴らしいお顔をしておられるのだらう。
肩から流れるようにまわれた薄い衣、母
親のような暖か味をもった右手、遠く百済よ
り持って来られた、絶えることのない清らか
な水の入った水びょう。わずかに開いておら
れる足、細く下半身の方が長いと思われる御
身体……しかしそれらがちっとも不自然で
なく、素晴らしく調和のとれた御身体なので
ある。

喜び、楽しさに心がうきうきしている時、
み仏の顔はにこやかな笑に包まれている。悲
しみ、苦しみに心が沈んでいる時、み仏のお
顔は、涙をこらえていらっしやるように、悲
しくもっている。とともに、
「そんなことにくじけず、前進して行くんだ
よ。そうすれば、きっと何か素晴らしいも
のに出会えるからね。」
と励まされる。

なんて素晴らしい仏であらう。
私の心には、旅行から帰った現在でも、百
済観音が存在している。そして、いつでも語
り合うことができるのである。

聖典物語

カピラ城の滅亡 (3)



た る つ
せん さん だん

するとお釈迦さまは、

「大王よ、親族の蔭は涼し！ことさらに外のものに勝る！」

ただそう答えられました。このおことばをきいたるり王は、お釈迦さまが、釈迦族のことをあわれみたまっていることを察し（世尊はカピラ城の王族である。このわたしも、世尊と同じように王族である。国へかえろう。カピラ城を征すべきではない）と、思い止ったるり王は、それ以上軍を進めることをせず、大軍を率いて舎衛城に引きあげました。

しかし、侍従の好古は、王にこうすすめました。

「王よ、先きに釈迦族の人が、王を下賤の婢女の子と罵ったことを思い出されませ。なぜそうためらいなさいます。ふらちな彼等を罰すべきでございます」

このことばをききますと、るり王は悪夢を想い出したよう

に再びいかりを覚え、顔に朱をそそいで、

「汝等、すぐ兵を集めよ、ようし、カピラ城を攻め落そう」

と叫びました。

このことを伝えきかれたお釈迦さまは、前と同じように道端にそびえ立って今にも倒れそうな枯木に坐禅されていました。再び大軍を率きつれたるり王はこの有り様を眺め、

お釈迦さまのお傍へ行きうやうやしく一礼して、

「世尊は繁った樹がありますのに、かしこに坐したまわずに、今日も何故に、このような枯木の下に坐禅なされていいます？」

とききますと、お釈迦さまは、

「親族の蔭は涼し、他人の蔭にまざる。以前はこの樹も枝

葉はよく繁っていたものである。かつてここを通った時には、この樹の蔭の力を借りたものである。たとい枯木になっても、親族の蔭は厚く捨てるべきものではない！」

静かに申されるおことばに王は、

（世尊は、釈迦族より出でたまわれた。わたしは征すべきではない。征すれば、世尊は必らず釈迦族を助けられるであろう。如来の神力には我が軍とて勝てるはずがない）こう考えて、再び途中から舎衛城へ引きあげました。

繁った大木を今や全盛を極めているコーサラ国としますと、枯木の大木はコーサラ国の圧迫を受けてその国運も風前の灯のようになっていく釈迦族の国を意味しています。お釈迦さまは、今にも倒れかかろうとしている枯木のような状態になっている生れ故郷の釈迦族の国へ、限らない大きな愛情をそそがれていたのです。

舎衛城へ帰ったる王は、侍従の好古にすすめられ亦もや三度目の大軍を率いてカピラ城を攻めようとしたのですが、お釈迦さまは枯木の下で坐禅されていました。お釈迦さまの無言の抗議に逢いましたる王は、やむなく三度目も軍を引き帰しました。

しかし間もなく、四度目の軍を率いてカピラ城へ攻めようとしているとの噂が伝わりますと、神通力第一で魔法を使う

ことが得意であつた目連尊者は、刻々に危機が迫っているカピラ城中の人々を何とかして救いたいと思つて、お釈迦さまのみ許に行き、

「世尊、るり王がカピラ城を亦もや攻めようとしています。わたしは思いますに、カピラ城の人々は必らずひどい苦しみに逢うことでしょう。わたしは見るにしのびません。それ故に、押しよせるるり王の大軍をことごとく他の世界へ投げすてたいと思いまする」

剛氣な目連は自信満々に、今にも神通力を使いかねない氣魄にみちて申しあげました。

「おんみは、宿運を他の世界へ投げすてることが出来るか」

「はい、それは出来かねます。……ではカピラ城を空中に置くか、さもなければ城を鉄の籠かごでつつみたいと思いまするか」

「おんみは、宿運を空中に停めることが出来るのか。……おんみは智徳にすぐれ、神通もありカピラ城の人々を安全なところへつれて行くことを知っている。しかし、おんみの神通力を以ってしても、宿運はいかんとすることも出来まい。目連よ、早く戻つて坐禅の座につくがよい」

お釈迦さまにさとされた目連は、やむを得ずその場を去つ

て行きました。

やがてるり王は四度目の大軍を率いて攻めのぼりカピラ城からほど遠くないところに陣地をつくって軍を集結すると、攻撃作戦をしきりに練っていました。

お釈迦さまは、るり王の意志をもはや阻止することが出来ないと思われたのか、今度は道にたたずまれなかったのです。

幼い時に受けた屈辱を思い起し今や復讐の鬼になったるり王は、お釈迦さまに道をはばまれなかったのを幸に一举にカピラ城をほふろうとしたのでした。

釈迦族は、カピラ城を出て勇敢にもるり王の大軍を迎え撃つため戦を挑みかけました。釈迦族は小国ながらも日頃から武芸を練り弓術に長じていましたから、練りに練った腕の見せどころと、るり王の大軍が集結している陣地へ矢の雨を降らせました。弓一筋を練って来た者たちですから、中には矢を一度に三本放つ者さえありました。

よもや城を出て戦うことはあるまいと思っている矢先に、それが思いがけない目の前の地点に迫っているのに驚いたのは、るり王でした。しかも応戦しようにも、釈迦族の兵は一人の姿さえ見えません。それが一そうるり王に不気味に感じさせました。

遙かに見えない遠い地点から強弓で放たれた矢は、いずれもみな命中しました。或る矢は甲に立ちました。或る矢は鎧に針りねずみのようにつつ立ちました。しかし、不思議にも、その人を少しも傷けませんでした。或る者は甲を射落された上、頭髪をすっかりそげ落されました。両の眉毛を射そられた者もいます。矢が弓に当って真つ二つに折ってしまい、或は馬の鞍に当って馬が驚いて逆か立ちとなり、真つ逆さに大地にころげ落ちる武将もいました。しかし、血げむりをあげて倒れる者は、不思議にも一人もありません。矢は間断なしに飛んで来るので王の兵はしりごみし、一步も進むことも出来ません。

そのうち王を狙っているのか、するどい矢じりの赤い矢、黒い矢が王の頭上に、或は身の傍へ異様なうなり立てて飛んで来ました。釈迦族は整然と攻めて来るかに見えました。

百発百中の正確な矢が、王の身邊の前後左右に雨の如く降って来ましたので、さすがの王も身の毛がよだちおびえて、

（先鋒がまだ交わらないのに、敵の勢はかくの如く盛んである。若し両軍が接戦した時は、わが軍はひとたまりもあるまい。彼らが、心を決して我が軍を害しようと思えば、我が兵は、あまねく討ち死するかも知れぬ。今は退いて、軍の安全を期するにしくはあるまい）

（つづく）

ほねえね

▽インド「日本寺」仏教会館の落成式

先年来、釈尊成道の聖地である、インド・ブッダガヤに「日本寺」を建設しようという運動が、国際仏教興隆協会（巖谷勝雄理事長、浄土宗、東京祐天寺住職）が中心となつてすすめられてきた。全日本仏教会、各宗派の全面的な協力を得て、この度、第一期工事の「国際仏教会館」が落成し、二月中に、各宗派の代表が現地赶赴いて、夫々落慶法要を行うこととなった。秋山祐雅真言宗智山派前管長、華山恵光臨済宗妙心寺派宗務総長なども大導師として参加するが、浄土宗法要団としては、大正大学前学長の佐藤密雄博士が団長となり、中村康隆正大仏教学部長、佐藤治子寺庭婦人会長、玉山玄重師御夫妻のほか、三十数名が同行する。二月十五日の会館落慶法要には、佐藤博士が大導師となり、インド

政府の要人や各国仏教徒を招待して、とくに現地人に対しは施食供養をおこなうなど、盛大さが予想されている。なお、一行は、法要終了後、インド仏跡を巡拝し、セイロン、タイ、カンボジア等仏教圏諸国を経て三月中旬、帰国の予定である。

▽知恩院「和順会館」の建設

浄土宗の総本山知恩院では、昭和四十九年に迎える法然上人浄土開宗八百年の記念事業として、信徒宿泊施設としての和順会館の建設が急ピッチですすめられている。

鶴館隆玄執事長が主唱者となり「家の宗教から個人の信仰へ」というスローガンのもとにお念仏の信仰を通じて「おてつき運動」を全国的に展開し、信徒組織の再編成をおこなっている。知恩院は、法然上人の祖廟のあるところであるが、これを中心として、全国の念仏信仰に生きる人々の「心のふるさと」という立場から、全国的に奉仕団を結成し、毎日数百名の団体が知恩院に詣て、信行の実践を通じて、念仏信仰の体験のよろこびを感得し、生かされるよろこびを人から人へ伝える実践運動が、おてつき運動の趣旨である。昭

和四十五年中には、その数も三十万以上に達するといわれるが、念仏信仰者の教化センターとしての「和順会館」も今夏には、その偉容を示すことであろう。

▽浄土宗辞典編纂、浄土宗全書覆刻再刊の準備すむ。

浄土開宗八百年記念準備局では、昭和四十九年に迎える開宗八百年を目ざして種々な記念事業を計画しているが、出版事業として、浄土宗辞典の編纂刊行と、浄土宗全書の覆刻再刊が予定され、その準備がすすめられている。辞典は、大正大、仏教大の教授陣が全面的に協力し合い、とくに東西の若手、中堅の学徒が中心となり、項目の選定から執筆依頼、原稿作成等、日夜努力を続けている。全書の方は、宗門より委嘱をうけて、東京山喜書房仏書林より再刊されることとなった。現在、浄土宗全書は、手に入りにくいだけに各方面より、その再刊が俟たれている。

▽知恩院NHKテレビで放映

三月二十五日午後十時十分より、NHKテレビで「日本の美」として知恩院がとりあげられ紹介される予定である。

年
七十三物妄真亦自他

(涅槃亡カ)

即今々々忘 南無阿陀

弥

写真は文明七年、今から約四百八十年くらいまえに三河岡崎に大樹寺を開いた勢譽愚底の辞世の句である。永正十三（一五一六）年四月十一日、七十三歳をもって大樹寺に寂した。

愚底は初め飯沼（茨城）の弘経寺二世の了暁慶善の門に入り、文明年間に岡崎に遊歴した。当時、三河の豪族であった松平宗家四代親忠の帰依によって文明七（一四七五）年鴨田に大樹寺を開いた。

愚底の浄土教化は親忠・子息の長親をはじめ松平一門の厚い帰依を得た。当時、三河においては師の了暁・兄弟々子の肇譽訓公・釈譽存問と共に浄土宗の布教に勤めていた。江戸時代到大樹寺は徳川家から厚い帰依と保護を受け大いに発展するが、その起源は開山愚底と開基親忠との結びつきにある。

大樹寺で昔からおこなわれている有名な別時念仏は応

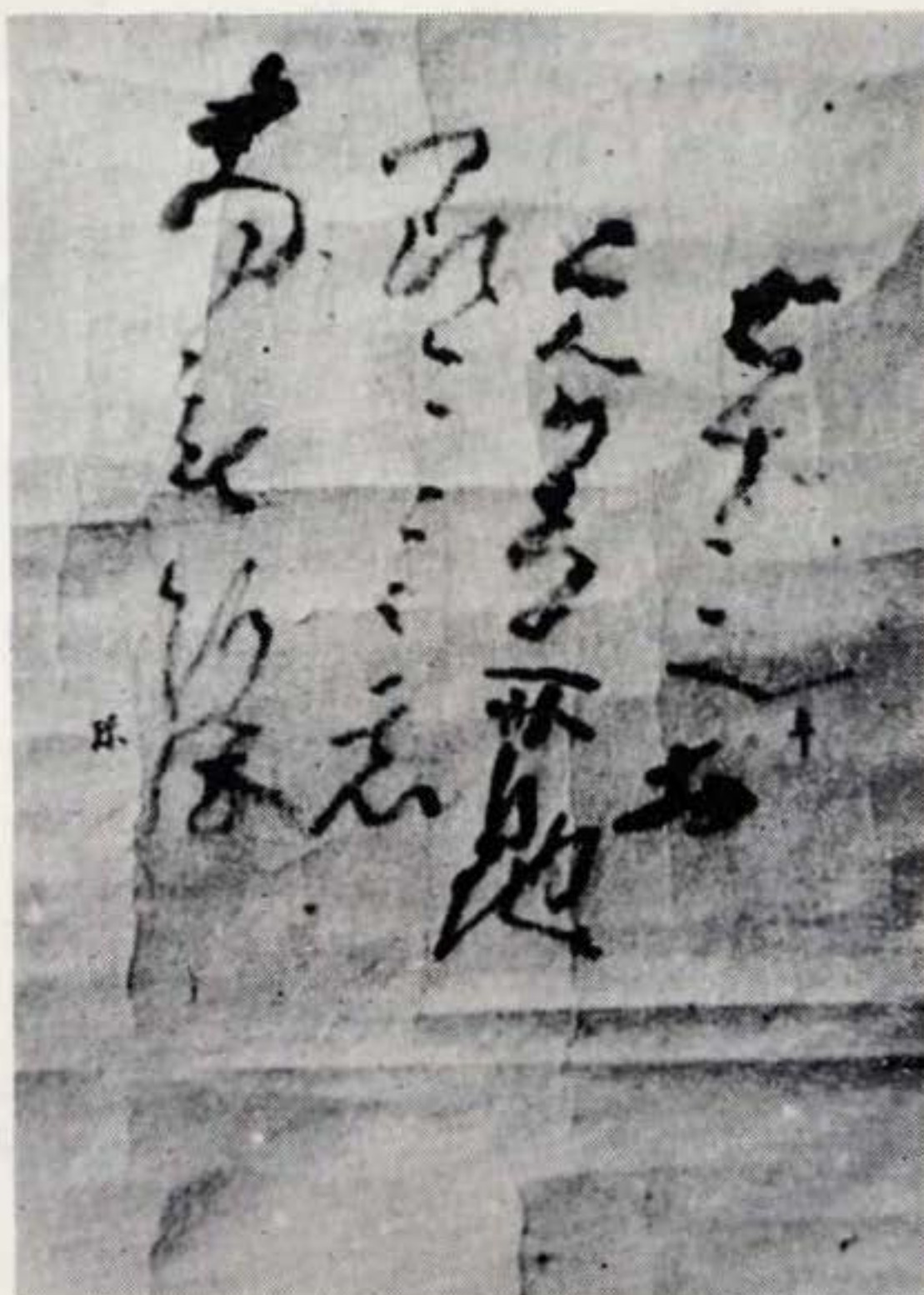
仁元年（一四六七）の井田野の合戦における敵味方の戦死者の霊を弔ったことに起元をなしているが、次第に松平一門を中心に毎年十月に七日間、祖先の菩提と現世利益をも願ったもので盛大に興行され一般の老若男女が参加して執行された。今日おこなわれている別時念仏は開山以来、長い歴史をもったもので大樹寺独特なものである。

愚底は戦国時代において墮落しつつある僧侶に対して、それは厳しい規制をもって養成し多くの名僧を排出した。永正元年（一五〇四）京都知恩院二十三世の住職となり、当時、応仁の乱で荒れはてた知恩院の復興に勤めた。永正八年（一五一二）辞山し再び大樹寺に帰山し長老として大樹寺の発展に寄与した。この句は、その臨終を前に残した辞世である。従って読みにくく、また脱字もある。臨終を前に意識も薄れ伏しながら記したものである。臨終を前に意識も薄れ伏しながら記したのも「即今涅槃亡」というのであろう。今、私は涅槃に入るのであるという。大樹寺を開き多くの寺院を建立し、かつ知恩院住職として浄土宗発展に大きく功績を残した働きと思えば、簡潔な短文ではあるが、そこには何んらこの世にくだらない満足感が感じられる。（佐々木洋之）

宝物シリーズ

伝勢誉愚底自筆辞世

愛知県岡崎市・大樹寺蔵



「浄土」購読規定

一部定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円

(送料不要)

浄土

三月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和四十五年二月二十五日印刷

昭和四十五年三月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人讃仰会

大 正 大 学

東京都豊島区西巣鴨4の530 電話(018)7311

昭和45年度学生募集

募集人員 200名・2,3年若干名 大学院修40名・博13名
カンセリング研究生(10名)

出願期日 第二次3月3日～3月24日

試験日 第二次3月26・27日

学 部 専 攻 科

仏教学部 仏教学科—仏教学・梵文学・浄土学・天台学・真言学

文学部 文学科—国文学・米英文学

史学科—日本史学

哲学科—西洋哲学・宗教学・中国学

社会学—社会科学社会事業

大学院文学研究科—仏教学・国文学・宗教学

カンセリング 研究生

男女寄宿舍あり☆詳細は同学庶務課入学案内へ(〒150円封入)

国内・国外・旅の御相談は……

旅は楽しいプランから——目的地、コースの選定、宿舎
旅券のお手配など、ごめんどうなことはなんでもお申し
つけください。

バン コク シヤ
(株) 萬告社観光部

東京都品川区東五反田2～1～3

TEL (441) 1693・7012

東京都登録邦人第61号